

【一般講演1】 第5席

「張仲景書にみられる鍼灸法の研究」

京都 直井明

三世紀初頭に成立したとさきれる張仲景の医書は、現在『傷寒論』『金匱玉函經』『金匱要略』として伝承されている。この三書は湯液家によって経方の聖典として伝承されているが、鍼灸治療に関する条文も少なくない。

『金匱要略』卷下第二十二に「審脉陰陽虛實緊弦、行其鍼薬治危得安、其雖同病脉各異源」とある様に、『傷寒論』の「越人入虢之診」とは鍼灸・湯液の統合的運用をもつ診断・治療体系であったと考えられる。一例として太陽病篇には「太陽病服桂枝湯、煩不鮮、先刺風池風府却與桂枝湯」と明記されている。鍼灸治療の単独使用及び湯液との併用方法は三陰三陽の各病位にまたがって記載されているほか、『金匱玉函經』に至っては卷六に四章にわたって鍼灸法の禁忌・適応が詳細に述べられている。

以上の様に張仲景書における鍼灸法の重要性に鑑みて、書中に散在する条文を抜き出して整理し、その資料を用いて鍼灸法の特徴を明らかにしたい。